

先日、生徒指導の会議で喜界島に行ってきました。喜界島には私の両親が住んでいて、高齢の両親に会える機会も一回増えることになり、また、お盆以来、行けていなかった先祖のお墓参りもできてとてもよかったです。

父は九十歳、母は八十八歳なので、年齢相応に心身の衰えが確実に見られ、会うたびに「これから、あと何回会えるのかな」と寂しい気持ちが湧き上がることを抑えることができませんが、だからこそ会えるときには親子での時間を大切にし、両親にとって嬉しくなる言葉、楽しくなる言葉、元気になる言葉で会話をするように心がけています。

そんな両親から私は数多くのことを学んできましたが、最も感謝していることの 하나가、「お墓参り」の習慣を身につけてくれたことなのです。

両親は結婚したときには東京に住んでいましたので、生まれた私も大学卒業までは東京で過ごしました。東京にも遠い親戚のお墓があつて、盆正月や春と秋のお彼岸に幼い頃から連れて行ってくれていたのです。

子どもの頃はただ両親について行き、墓地周りの草むしりをし、墓石の汚れを水で洗い落とすのを手伝い、お供え物をして、ご先祖様に手を合わせていました。そして、帰るときにはお備えしたお菓子などをカラスなどに食べられないように持ち帰るのですが、このお菓子を後で家族で食べられるのが、子供心に何よりの楽しみでした。「お墓参り」は楽しいものだという記憶がこうして私の心に刻まれたのです。

中学生になっても我が家の「お墓参り」は続きました。ただ、私の中で一つ変化が生まれました。子どもの頃はただ手を合わせていたのですが、中学生になると、「今度、部活動の試合があるんです。天から応援しててください」とか、「いよいよ大学入試を迎える年になりました。がんばります」とか、自分の内面にある素直な気持ちを出しながら、ご先祖様に手を合わせている自分の気がついたのです。そうするとなぜか不思議なことに、帰るときには自分の気持ちの整理ができて、来るときよりほんの少し気分が晴れやかに軽くなる感じがするようになったのです。

その後は、盆正月やお彼岸以外に、家族とではなく一人で行くようにもなりました。何か不安なことがあるとき、家族や友人などに話せないようなことがあったり、自分の気持ちを整理したいときなどに、私は一人で「お墓参り」に行きました。「自分ではこのように物事を進めたいと思いますが、大丈夫ですよね」のような感じで手を合わせるのです。自分の気持ちに踏ん切りを付ける、割り切るということを「お墓参り」を通して私はしていたのかもしれない。こうすることで私は、ご先祖様が具体的な言葉を返してくれるわけではな

くても、自分の心の中で正直な自分の気持ちをご先祖様に語りかけるだけで自分の気持ちが落ち着いてくる、心の整理ができることを体験的に学びました。

皆さんは「風の電話」というものを聞いたことがありますか。岩手県大槌町の高台に電話線のつながっていない電話ボックスがあるのです。病気でいところを亡くした佐々木格（いたる）さんという方が、物理的な距離を超えて心がつながる象徴として、自宅の庭園に業者から譲り受けた廃品の電話ボックスを設置したのが始まりだそうです。東日本大震災によって大切な人を突然失った遺族たちに、この「風の電話」を開放したところ、震災後六年間で全国から二万五千人の方が訪れたそうです。今でもその数は増え続けています。

先ほども言ったとおり、この電話には回線がつながっていません。実際には誰とも通話することはできないものです。当然のことながら亡くなった方の声が受話器から聞こえて、会話ができるなんてこともありません。でも、だっただらなせ、こんなにも多くの人がここを訪れるのか。

佐々木さんは自らの著書で次のように語ります。この「風の電話」は、『何らかの事情で喪失感を抱いた方が自分の想いを吐露することにより心の重荷、負担を軽減し、再び生きようと意識の向け換えができるようになることを望んで訪れるところ』なのだ。

『小高い丘のガーデンに立ち、風を身体全体に纏うことで、その風が、亡き人の思いを運んできてくれ、また同時に、自分の思いを伝えてくれることを直に感じ取る。そして、電話口で話し始めたとき、私たちは、電話のその先に、愛しい人の存在を確かに感じ、これまでじっと秘めていた思いを語ることができようになる。私たちは、思いを言葉にし、相手に語りかけることで、相手へその思いを伝えることができる。言いたくても言えなかったこと、最後に添えてあげたかった言葉を、一つずつ相手へ伝えていく、その体験過程を、電話は促してくれるのだ。』と佐々木さんは語るのです。

これを読んで私は、自分が先祖の「お墓参り」を通してしていた心の整理の仕方と根底は同じなのではないかと感じました。人間は、手段は何であれ、そのときの正直な気持ち、例えば悲しみや苦しみ、不安や絶望感などを吐き出すことにより、心が少しずつ自己回復していくのではないかと私は思うのです。

この「風の電話」が、今では世界十七カ国の四百カ所以上に広がっているという新聞記事を先日読みました。日本だけでなく、世界中で同じような境遇を抱えた人たちが、「風の電話」で心を落ち着かせていることを知ると、人間の心の奥底には弱さばかりでなく強靱さ、しなやかさや回復力が備わっていて、しかもそれは国籍に関係ないものなのではないかと私は感じるので。

我々、与論高校も先月、大切な仲間を突然一人失いました。私は葬儀まで参列してきましたが、坂元さんの与論最後の夜のお別れの会に多くの生徒の皆さんや先生方が駆けつけてくれたこと、たくさんの手紙やメッセージが葬儀に届

いていたことを奥様が大変感謝されていたことを、学校を代表する者としてここでお伝えしておきます。手紙やメッセージからは、皆さんが坂元さんを、図書室の先生として、部活動の指導者として、どれほど慕っていたかがうかがえました。きっと、皆さんのその思いは、皆さんの心の中にある「風の電話」を通じて坂元さんに届いていることと思います。

今回の件を通じて私は、自分が日々生きていることが当たり前のことではないのだと感じるようになりました。朝、目を覚まして自分が生きている。これはすぐく有り難い特別なことなのだ。皆さんには若くして亡くなった坂元さんの分まで、自分の命を大切にし、それと同じくらい周りの人の命も大切にしながら生きていってほしいと思います。

「鉄平ちゃん、与論高校のために今まで本当にありがとうございます。トウトガナシ」

なお、今日の話の参考にした「風の電話」という書籍、それをもとに作られた「かぜのでんわ」という絵本を私から図書室に寄贈したいと思います。興味のある人は手に取って読んでみてください。